19世紀西洋図像新聞に見る「龍」と「ドラゴン」

── 黄禍的中国像の視覚構築について ──

陳　其　松

St. George and the Chinese Dragon
―Visual Construction of China in the 19th Century Western Pictorials

CHEN Chi-sung

Abstract

Dragon, the symbol of Chinese imperial power, is one of the famous visual icons of China. However, the sacred creature was usually depicted as the grim, evil monster, the western dragon, in 19th century western pictorials. In several caricatures, the western dragon in famous Christian tale, "St. George and the dragon" was replaced by the Chinese one, as an allegory of the contradiction between China and Western countries. Through inspecting the deliberate confusion on the image of Chinese and Western dragons, this article attempt to reveal a western-centered visual construction of Chinese image in 19th century pictorials.

Key words：黄禍、視覚構築、オリエンタリズム、西洋図像新聞、挿絵

はじめに

19世紀中葉、*The Illustrated London News* を初めとする西洋図像新聞の隆盛が、西洋出版業に新たな風が吹き始めた。「図像」という新たな情報媒介を本格的に取り入れることにより、「記事に図像」という現代新聞紙の形が定着し、西洋社会における情報伝播の形態に大いに影響した。19世紀東西交渉の活発化を背景として、東アジア諸国を描く新聞図像も多数掲載された。そのなかに、極東の大帝国、中国の風俗、出来事、人物などの図像が最も多く掲載され、西洋人の中国関心を高揚していた。当時の新聞には、国家を動物で表すカリカチュア的な表現手法が流行していた。中国の場合は、天子を代表する聖獣、「龍」が、当然その代表的なシンボルとして広く認識されていた。

しかし、西洋新聞紙に見た「龍」は、中国の文脈から離れた上、形態と性質にかなりの変化が見受けられる。阿片戦争、日清戦争、義和団事件の関連報道に「龍」が中国の代弁者として登場していたが、何れも災いと騒乱をもたらした化物の形で現れた。さらに西洋の歴史に長らく破壊と暗黒の象徴とされてきた「ドラゴン」と混同された現象も興味深い。「聖ゲオルギウスとドラゴン」という、悪龍退治物語のパロディーにも、中国の「龍」が登場させられた。西洋文明を象徴するキリスト聖人の矛先に牙を剥いた龍は、聖獣どころか、むしろ西洋の敵、文明の敵にしか見えない。このような、「龍」というアイコンに対する視覚的な操作は、恐らく19世紀の中国黄禍論の言説の一環となり、無関係とは言い切れないと思われる。

そこで本文は、*Punch*[1]、*Harper's Weekly*[2]、*The Illustrated Police News*[3] などの西洋新聞紙から収集された「龍」の関連図像を踏まえ、新聞という世論の場における東の「龍」と西の「ドラゴン」の視覚的な交渉様相を捉えたい。図像内容を分析し、背景となる言説と衝突を視野に入れた上、中国像に対する視覚的構築の一側面として検討したい。

Ⅰ　中国王権の象徴――「龍」

龍とドラゴンは、異なる伝承と神話を持ちながら、それぞれ東西文化におけるシンボル的な存在である。元々中国東北部の森林地帯に豚と鹿などの動物が融合し、作られた合成獣「豚龍」が5700年前の気候の寒冷化による人口移動で、長江流域に伝播したのが起源[4] と言われる。後

1）本論文引用した *Punch* の図像について、【図16】、【図18】と【図19】、は東田雅博（1998）、『図像のなかの中国と日本　ヴィクトリア朝のオリエント幻想』を参照した。【図９】【図10】【図11】【図12】【図13】【図14】【図15】は関西学院大学所蔵 *Punch* 誌に依拠した。

2）関西学院大学所蔵本に依拠。

3）東京大学文学部図書室所蔵マイクロフィルムに依拠。

4）安田喜憲（2006）、「龍の文明史」、『龍の文明史』、安田喜憲 編、東京：八坂書房

【図１】北京北海公園の九龍壁[7)]

【図２】黄龍旗（三角）

に蛇と水の信仰とを結合し、水神の性格も持つようになった。『管子』に「龍は水から生ず」とあり、『春秋左氏伝』昭公二十九年（B.C.513）にも「龍は水物なり」と書かれるように、龍と水の関連は深かった[5)]。『抱朴子』には、西域の術者が干ばつに苦しむ国に龍を売りに来て、湖に龍を置いたら忽ち雨が降ったという話もある[6)]。形態としては、「龍の角は鹿に似、頭は駝に似、眼は鬼に似、頸は蛇に似、腹は蜃に似、鱗は鯉に似、爪は鷹に似、掌は虎に似、耳は牛に似ている」とある。龍が中国の王権の象徴となって以降、爪の数は龍の特に五爪の龍は天子しか使えず、最も神聖視された（【図１】）。

1868年にアンソン・バーリンゲーム（Anson Burlingame, 1820-1870）が率いた清末最初の公式使節団がアメリカを訪れた時も、黄色い生地に四爪龍の「黄龍旗」（【図２】）を用いた。しかも正統王権だけではなく、それへの挑戦者も、龍の模様を意識的に使用しようとしている。例えば太平天国運動の指導者洪秀全は、思想的にキリスト教の影響を受けたとはいえ、天国の権威と支配の正統性を強調するために、やはり中国古来の王権にモデルを求めた。それで太平天国の服制に龍と鳳凰などの模様を取り入れた（【表１】、【図３】、【図４】、【図５】）。このことから龍が中国の文脈において、王権と深く関連した聖獣であると言える。

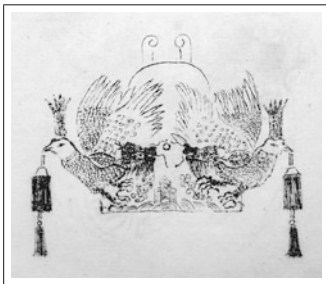
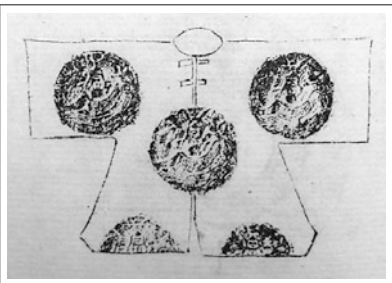
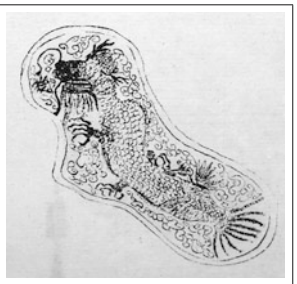
Ⅱ　悪と暗黒の形象化――「ドラゴン」

1）キリスト教伝統における「ドラゴン」

中国の龍が神話の域から王権のシンボルまで格上げされたのに対し、西洋のドラゴンは、長らく悪と暗黒の象徴として認識されている。「宝物など物欲の守護者，神の思寵の妨害者，王女

5）荒川紘（1996）、『龍の起源』、56頁
6）伊藤清司（2006）、「操蛇擾龍の事」註28、『龍の文明史』、安田喜憲 編、東京：八坂書房
7）クリストファー・デル（2010）、『世界の怪物・魔物文化図鑑』、松平俊久 訳、東京：柊風舎、79頁
8）【表１】は関西大学増田文庫所蔵本の『賊情彙纂』により作成した。

【表１】『賊情彙纂』に見る太平天国の服飾[8)]

		
【図３】賊角帽図	【図４】偽団龍馬褂図	【図５】賊風帽図

や娘などの迫害者であり，勇士，騎士などと戦って結局は退治される悪と暗黒の力の形象化[9)]」とされた「ドラゴン」（dragon）は、キリスト教の伝統において、龍がしばしば教敵として取り上げられる。例えば聖書の「ヨハネ黙示録」第十二章に、大天使ミカエルと７つの頭を持つ赤い龍、「ピュトン」との戦いを描写した。龍が被る７つの冠から、キリスト教を迫害したローマ皇帝たちを喩えると伺える[10)]。またヨーロッパに中世期から伝承されてきた豊穣祈願の行進において、ドラゴンのマスコットが最初の二日間意気揚々にしっぽを振り舞い、道行きをリードするが、三日目には頭としっぽを下げ、十字架に従うという儀式がある。これは悪魔を象徴するドラゴンが神聖の力に打ち負かされることを意味する[11)]。

2)「聖ゲオルギウスとドラゴン」

神の力が、下界における代行者たち、キリスト教の聖人たちによって行われる。そのため、悪龍退治の伝説は、しばしば地域の聖人の生涯行跡としてあげられる[12)]。その中、イギリスの守護聖人、聖ゲオルギオスとドラゴンの逸話は最も広く知らされた１つであろう。ヨーロッパ中世の初期にこの伝説を記録したヤコブス・デ・ウォラギネの『黄金伝説』によると[13)]、リビアのシレナという町に近い湖に悪竜が生息していた。毎日二匹の羊を捧げることで、町が襲われることから免れたが、羊が尽きたら、次は人間を生贄として悪竜に与えるしかなかった。偶然に通りかかった聖ゲオルギオスが、その日の生贄に選ばれた王女から経緯を知り、悪竜を退治した。それで全国二万人ほどが洗礼を受けたという[14)]。

9）ブリタニカ国際百科事典小項目の「ドラゴン」の条目を参照。
10）荒川紘（1996）、『龍の起源』、56頁
11）マリ＝フランス・グースカン 著　樋口淳 訳（1991）、『フランスの祭りと暦』、東京：原書房、70、73頁
12）マリ＝フランス・グースカン（1991）、前掲書、71、72頁
13）サビン・バリング＝グールド（2007）、『ヨーロッパをさすらう異形の物語　上 ── 中世の幻想・神話・伝説』、村田綾子・佐藤利恵・内田久美子 訳、東京：柏書房、277-280頁
14）バリング（2007）、前掲書、275頁

【表２】宗教美術に見た「聖ゲオルギオスとドラゴン」

【図６】（15世紀）	【図７】（15世紀）	【図８】（19世紀）

４世紀から聖ゲオルギオスが殉教者として認識されて以来、その衰えない人気で、「聖ゲオルギウスとドラゴン」は宗教画の一画題となり、絵画、教会のステンドグラスなどにその模様が見られる（【表２】）。図像の内容は、聖ゲオルギウスが槍を高く振り上げ、目前のドラゴンにとどめを刺すという緊迫の瞬間を描くものである。基本構図も大体定められており、画面を分断するほど長い槍と立ち上がる馬により、緊迫感を与える三角構図が殆どである。そして馬に乗っている聖ゲオルギウスを大きく画面の中央に、聖人に立ち向かうドラゴンが右下に配置する。少々離れた所に聖人の勝利を祈る王女の姿も見える。

「聖ゲオルギウスとドラゴン」には、善と悪の対立構図も伺える。災いをもたらす、野性的、破壊的な力の持ち主であるドラゴンと、神の教えに従う、自律的、正義的な聖人との対極性が明らかである。両者の戦いは、神の力と意志を証明するのであれば、その結末も聖人の勝利に決まっている。聖ゲオルギウスに退治されたドラゴンが、前述の豊穣祈願のパレードのドラゴンと同じく、最後に十字架、聖人が体現された神の「善」の力に屈するしかなかった。

3）大衆新聞紙に見た「聖ゲオルギウスとドラゴン」のモチーフ

「聖ゲオルギウスとドラゴン」の人気が、19世紀大衆新聞紙にも見られる。ただし大衆新聞紙の時代に見られるこの図像の内容が、宗教美術という段階より世俗的となり、聖ゲオルギウスとドラゴンの姿にも時代の趣味と関心が反映される。例えばイギリスにおける最も名高い風刺新聞紙、*Punch* には、しばしばその逸話を転用した図像が見られる（【表３】）。しかし、聖ゲオルギウスは同紙のイメージキャラクター、「パンチ」（Punch）に置き換えられ、ドラゴンの

【表３】*Punch* に見る「聖ゲオルギオスとドラゴン」のモチーフ

【図９】[15]	【図10】[16]	【図11】[17]	【図12】[18]

姿もコメディー的に仕上げられている（【図９】【図10】【図11】）。1846年にイギリスの５ペンス・コインが聖ゲオルギオスとドラゴンの模様から女神と獅子の模様に変えられた。【図12】はその年の風刺漫画であり、聖ゲオルギウスがやむを得ず引退する悔しさを語っている。

以上から、「聖ゲオルギオス対ドラゴン」というテーマは、西洋の文脈において、善（聖ゲオルギオス）と悪（ドラゴン）との対極的な構図がわかる。宗教美術の域を越え、19世紀の新聞図像にも取り上げられたほど衰えない人気のモチーフが西洋民衆の間では常識的であることを裏付ける。一方、19世紀に東アジア世界との交流が盛んとなるにつれて、東洋の「龍」がよく中国を代表するシンボルとして取り上げられ、モチーフとして様々な図像に取り入れられた。ただし、「龍」と「ドラゴン」が新聞図像に流用されることにより、各自の性質も漸次に変化してきた。中国と西洋の衝突を描く風刺漫画に登場させられた龍が、ドラゴンのような破壊的、後進的な怪物に描かれ、さらに「聖ゲオルギウスとドラゴン」の物語のパロディーにも登場させられた。ドラゴンの代わりに聖人の槍に向かった龍は、如何なる西洋の中国観を反映していたのであろうか。

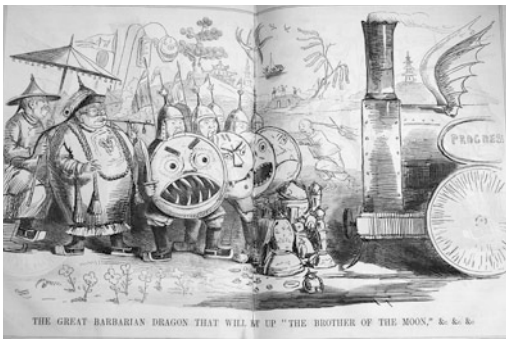
Ⅲ　西洋新聞紙に見る「龍」と「ドラゴン」

本節は、*Punch*、*Harper's Weekly* と *The Illustrated Police News* に掲載された龍・ドラゴンの図像を例とし、東西文化接触の境界における文化シンボルの転用と変形などの現象は、如何に特定的な中国観と関わったかについて検討したい。

15）*Punch*, 1845, vol 9（Jul-Dec）, p149
16）*Punch*, 1845, vol 9（Jul-Dec）, p244
17）*Punch*, 1846, vol10（Jan-Jun）, p281
18）*Punch*, 1846, vol11（Jul-Dec）, p200

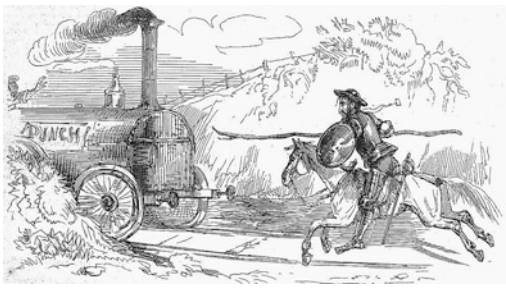
1）文明の機関車、「ドラゴン」と中国

1853年の*Punch*が「月の兄弟を食べ尽くす、大いなる野蛮なドラゴン」（【図13】）という図像を掲載した。画面の左側に、中国の軍勢が構えている。背景の橋、鳥、柳、宝塔などから、戦場は中国であることが確認できる。肥満な中国の将領が下僕のさした日傘の下で、煙管を銜えながら平然と戦局を見守っている。陣の先頭に立つ兵士たちは刀と盾を持ち、万全な臨戦態勢を取っている。盾に描かれている威喝の顔までも、前の敵を睨んでいる。しかし、彼らの敵はあまりにも桁外れである。「大いなる野蛮なドラゴン」とは、まさに白煙を吐きながら陣形に突っ込んでくる蒸気機関車である。その車体に「進歩」（progress）と書かれた上に、ドラゴンの翼もある。これはさすがに勝てるわけがない相手なのに、中国側には僅かな動揺の様子もなく、その衝撃に迎え撃つ気概が見られる。

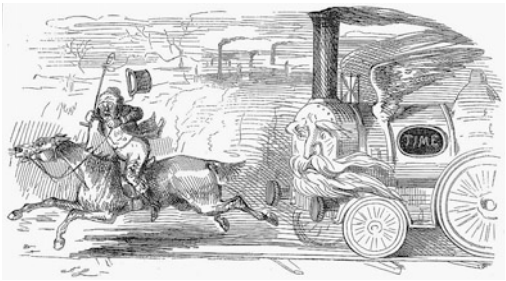


【図13】THE GREAT BARBARIAN DRAGON THAT WILL EAT UP “THE BROTHER OF THE MOON.”[19]

【図13】は、明らかに中国の後進性を嘲笑うかのようであるが、文明と科学の象徴、鉄道を「ドラゴン」のイメージと結合させたのは興味深い。交通革命を体験していた19世紀のイギリスでは、鉄道はまさに科学と進歩の象徴であった。1844年と1845年に同じ*Punch*に掲載された【図14】【図15】から、鉄道の発展を阻止しようとする図像からは、まさにドンキホーテのような無謀かつ時代遅れが読み取れる。*Punch*が機関車のことを、「大いなる野蛮なドラゴン」（great barbarian dragon）と名付けるのも、恐らく「大英帝国のドラゴン」（Great Britain［’s］dragon）



【図14】[20]



【図15】[21]

19）*Punch*, 1853.09.03
20）*Punch*, 1844, vol 6 （Jan-Jun）, p83
21）*Punch*, 1845, vol 9 （Jul-Dec）, p189

の言葉遊びであり、中国の西洋に対する高慢さを皮肉っているであろう。さらに、ここでは「ドラゴン」の圧倒的な破壊力と好戦的な習性は、蒸気機関車に代表される科学文明に逆らえない時代の流れと喩えられ、中国の頑固さと後進性を表現しようとしている。このことから【図13】の画題は、野蛮・文明の対峙とも言える。「龍の伝人」と自称している中国人が、「野蛮」なドラゴンが代表する「文明」の力に吹き飛ばされることが予見できるであろう。

2）聖ゲオルギオスと「龍」

聖ゲオルギオスのドラゴン退治物語は、広範に認識された西洋の伝統的なモチーフである。しかし、前述のように、元々聖ゲオルギオスが退治した「ドラゴン」は、中国の「龍」にすり替えられた現象が見られる。

1860年、第二次アヘン戦争の時期に、*Punch*に【図16】、「中国でやるべき事」（What we ought to do in China）を掲載した。馬に乗った西洋の騎士が、片手で大きな鉄球を振り下ろそうとしたところである。彼の目標は、画面の右下にいる風変わりの怪物である。この怪物は、体は大きなトカゲのように見えるが、後ろ足が中国の布靴を履いている。そして龍の角、吊り目、鬚と長く伸びた辮髪など明らかに中国的な要素が確認できる。この龍は、斜めに騎士を睨みながら、必死に騎士の攻撃から逃げようとしている。

【図16】WHAT WE OUGHT TO DO IN CHINA[22]

【図16】は、明らかに聖ゲオルギオスのドラゴン退治物語をモデルにした図である。ただ騎士がとどめを刺そうとしたのは、「ドラゴン」ではなく、爬虫類のように描かれた中国の龍であった。龍の体にすでに鉄球に打たれた傷跡があるにも関わらず、西洋の騎士が、次のストライクのために構えている。それは、一回の打撃だけで、アヘン戦争の条約執行に躊躇する清朝政府に教訓を思い知らせるには足りず、イギリスが中国にもっと怒りの鉄球を食わせるべきであると語っている。

3）開化された「ドラゴン」

「龍」で中国を喩えるイラストは、イギリスだけでなくアメリカの新聞紙にも例が見られる。カリフォルニア州で金鉱が発見された1850年代から、アメリカは中国移民を安価な労働力として大量に導入した。それで現地の白人労働者の間に中国移民を排斥する動きが、60年代、70年

22）*Punch*, 1860.12.22

代より目立つようになった。1882年１月28日の *Harper's Weekly* の「聖ゲオルギウスとドラゴン」（St. George and the Dragon[23]、【図17】）もこの中国黄禍論の世論下の一枚である。【図17】の背景は、最初にロンドンと上海の間を結ぶ汽船航路である。ただし、貿易を求めに来た最初の汽船「Meifoo」は歓迎されるどころか、恐慌でも起こすかもしれないと、*Harper's Weekly* の記事がイギリスの新聞紙を引用しながら述べた[24]。下端のキャプションに、「ドラゴンが開化されても、聖ゲオルギウスのご機嫌を取れそうもない」（St. George does not seem pleased with the dragon civilized）とある。図面を見ると、テームズ川の埠頭に、米、お茶と生糸が大量に積載されている一隻の汽船が停泊している。「MEIFOO」という中国風の船名と船尾に「黄龍旗」と龍の装飾が見られることから、中国船である事がわかる。だが、一人の紳士が、不機嫌に目の前にいる中国人船主を睨んでおり、荷揚げを阻んでいる。船主は一生懸命に営業スマイルをしながら、両手を胸の前に合わせ、従順のように見えるが、大きく開いた口の中に、人間の皮をかぶっているの龍の顎が見える。

【図17】ST GEORGE AND THE DRAGON[25]

ここで、再び「聖ゲオルギウスとドラゴン」の物語が取り上げられた。人間の皮をかぶるドラゴンと聖ゲオルギウスとの対峙を描く【図17】は、中国とイギリスの貿易の対立関係を喩えた。「開化されたドラコン」という言葉に示されたように、文明の衣服を着ていても、神秘、野蛮、貪欲な「ドラゴン」こそ、中国の「本質」である。ここにおいて、中国の「文化」と「民族性」が、龍とドラゴンの形象混同により再生産された。いくら汽船を持ち貿易を行おうとしても、所詮西洋の真似にすぎず、「文明」の本質は、必ずスーツ姿の紳士が代表する西洋にあると、【図17】は訴えている。オリエンタル想像と西洋中心的な文化原理主義との結びきこそ、「開化されたドラゴン」が生み出された理由である。

4）日清戦争の「龍」と「竜」

1894年に勃発した日清戦争に西洋人も関心の目を向けた。特に、東アジアの一大国も中国と明治維新で西洋化を進展させた日本との戦いの行方は、大いに極東の情勢を左右するものとして

23）*Harper's Weekly,* 1882.01.28
24）「もしこの航路の開設が成功すれば、ロンドンが忽ちに数千の中国移民を溢れるようになるであろう。」
25）*Harper's Weekly,* 1882.01.28

世界的関心を集めた。1894年８月11日の*Punch*に「まさに文明の勝利！」（【図18】、The Triumph of Civilisation!）を掲載した。左に二匹の龍がマスケットを持ち、殺し合っている。大きな龍は辮髪で、中国を喩える一方、日本はやや小さめな龍として描かれた。日本は中国に銃を構え、尻尾に付いていた魚雷も照準されている。憂い目でこの二匹の龍の戦いを見守るのは、ギリシアの彫像を想起させる女神である。女神のベルトに書かれている「ヨーロッパ文明」（European Civilisation）は彼女の身分を示している。女神の足元に各種の火器、銃弾が転んでいる。この図像は、西洋文明が東アジアを近代化させることは、日清戦争のような事軍衝突に導くことにすぎず、アジアを「文明化」させる意欲の後退を示している。見出しの「まさに文明の勝利！」は反語で、実はアジアの「文明化」の方向性を疑うのである。こちらの龍は、また「文明」と対極な位置に置かれていることがわかる。「龍」の東洋的性格が、いつの間にかその時代のアジア観と繋がり、「後進さ」と「野蛮」の記号になった[27]。

【図18】The Triumph of Civilisation！[26]

5)「龍」から「ドラゴン」へ

義和団事件の時、*Punch*に掲載された「復讐！」（The Avenger!、【図19】）も聖ゲオルギオスと龍の対峙で構成された。図面に、白馬に乗った天使が槍を高く振り上げ、目の前の牙を剥いた龍を刺そうとする瞬間が描かれている。胸の前に挙げられた盾に描かれた無地に赤十字の紋章は、聖ゲオルギオスの象徴であることから、この天使はイギリスを擬人化したことがわかる。ただし、ここで注目したいのは、天使の翼に書いてある、「文明」（Civilisation）という文字である。つまり、天使・イギリスが代表する西洋文明が、文化の力で野蛮な中国に打ち負す大義があることを意味する。「復讐」というタイトルからも、その武力行使は正義的であり、正当性がある。ここで掲載された「龍」は、

【図19】The Avenger！[28]

26）*Punch*, 1894.08.11
27）東田（1998）、前掲書、p198
28）*Punch*, 1900.07.25

形態的は中国の龍に近いが、聖人の敵、文明の敵として扱わされたところから言うと、むしろ「ドラゴン」の方に近いと言わざるを得ない。

6）「龍」から「ドラゴン」へ

この黄禍的な中国観の頂点は、恐らく *The Illustrated Police News*、1900年８月18日の【図20】、「窮地に落ちた――我々の救援は間に合うのか」に最も現れているであろう。炎上している屋敷の庭に、イギリス、フランス、ロシア、日本、アメリカ、イタリアの大使たちの死体が血溜まりに積み重ねられた。そして死体の山の上に一匹の化物が載っている。体に鱗が覆い、悪魔の尻尾と背中の翼がついているので、間違いなくこの怪物は「ドラゴン」である。ドラゴンはドイツ大使の体に噛み付きながら、口から血が垂れている。瀕死のドイツ大使の握った手が空に上げ、まるで抗議しているように見えるが、化物の前にはあまりにも無力であった。遠方には、急進軍している「連合軍」（allied forces）の姿が見える。しかし、すでに遅れているかもしれない。

Illustrated Police News は元々犯罪内容を扱う記事を中心とした新聞紙であり、犯罪者肖像、処刑場の様子、犯行の想像図などを多数掲載した。そのためその記事も *ILN*（英）、*Harper's Weekly*（米）、*Le Monde*（仏）など大手新聞紙より読者の感情を煽る傾向となった。そして【図20】の一週間まえに、同紙がヨーロッパ人の奮戦ぶりを報じた【図21】をも掲載した。義和団についての歴史の功罪をまず置き、当時の西洋人の理解した義和団は、自国民を異国の地で虐殺する暴民たちに違いないであろうと見た。このような感情はいつの時代でも共通であろう。

【図20】In Dire Peril[29)]

【図21】Europeans in Pekin Safe on July 21[30)]

29）*The Illustrated Police News,* 1900.08.18
30）*The Illustrated Police News,* 1900.08.11

それで、【図20】に見る中国は、もはや「龍」の形さえも保てず、各国の使節の血と肉を食い尽くす「ドラゴン」に化けた。この血まみれで、残虐な【図20】は、義和団事件に対する西洋民衆の怒りを表しているであろう。

小　結

長らく中国の王権のシンボルとなり、雲も雨も自由に操れる龍と、強欲で狡猾、絶対的な力を持ちながら、いつも英雄の槍と戦い続いた「ドラゴン」は、各自の伝承と神話を持ち、東西それぞれの文脈の中から誕生した空想的な生き物である。しかし、架空の生物、「龍」と「ドラゴン」は、独自的な存在ではない。形態的にも他の生き物から部分的に取り入れて合成し、神話にもいろいろな既成のモデルとの繋がりが見える。むしろ幻獣であるこそ、異なる文化要素を取り入れ、新しい概念を生み出せる力がついているからかもしれない。

19世紀は、図像と文字が併用される現代新聞の原型を定着させた時代であった。大量に生み出された新聞図像は、西洋における情報流通の形態、及び西洋民衆の対外認識にも影響を与え、それぞれ東西文化のシンボルとなる「龍」と「ドラゴン」にかつてない出会いの場を提供できた。ただし、「文化交渉」が暗示した文化のハイブリッド性のように、図像記号としての「龍」と「ドラゴン」の間の文化的な境界も徐々に崩れて行った。結局、龍の神聖性がドラゴンの破壊性に侵食され、やがて取り憑かれた。そのため「龍」が聖ゲオルギオスに牙を剥いたり（【図16】【図19】）、時には「龍」が完全に「ドラゴン」に成り切ったりした（【図20】）。それで、東洋のシンボルの「龍」が、西洋の「ドラゴン」の神話と伝承に融合させられ、西洋読者の理解した、或いは理解できる特定の中国像が創り出された。

「龍」というアイコンに対する視覚的、政治的な構築は、中国の未開と後進さを示した上、中国の本質を「ドラゴン」が象徴する邪悪、残虐などに繋げる働きもある。このような異質的、他者的な中国観が、新聞図像に描かれた「龍・ドラゴン」に視覚的、象徴的に現れている。本文の調査で解き明かしたように、「龍」の図像の掲載時期は、殆ど東西交流史の大きな動きと連動する。例えば、「月の兄弟を食べ尽くす、大いなる野蛮なドラゴン」（【図13】）は、アヘン戦争による中国開国の直後に、「中国でやるべき事」（【図16】）は第二次アヘン戦争の時期に、「ドラゴンが開化されても、聖ゲオルギウスのご機嫌を取れそうもない」（【図17】）は、アメリカにおける排華運動の最中に、「まさに文明の勝利！」（【図18】）は日清戦争時期に、「復讐！」（【図19】）と「窮地に落ちた――我々の救援は間に合えるか」（【図20】）は義和団事件などの時期であった。暴れまくった末、文明の敵として聖人に裁かれた「龍」の姿が、まさに黄禍的な中国観の投影である。西洋新聞紙に見る「ドラゴン」的な「龍」は、19世紀における東西文化交渉のねじれを理解するための、視覚的な手掛かりを残したと言えるであろう。